

## 「イラン・イスラム共和国の社会と女性」

### 【イラン・イスラム共和国について】

#### 《イランの位置など》

イランは、パキスタン・アフガニスタン・トルコ・イラクに囲まれており、9・11同時多発テロ事件以降にアメリカが侵攻したアフガニスタン・イラクに挟まれている。面積は日本の約4倍の160万km<sup>2</sup>で、そこに日本の人口の約半分の6800万人の人々が生活している。首都はテヘラン。他にエスファハーン・シーラーズという大きな二つの街があり、両者には世界遺産が存在する。イランは中東の中でも人口、面積ともに比較的大きな国である。

人口についてももう少し細かく見ていくと、若者が多いという特徴があり、0歳から大学生までの年齢層が、人口のほぼ半分以上を占めている。若者世代の多い原因の一つにイスラム革命が挙げられる。イランの人口増加率は、以前は大きな変化はなかったが、1976年から年率3.2%で増加。結果的に1970年代80年代の人口増加率は爆発的に上昇し、90年代に入って一気に減少に転じた。この人口増加率の上昇は、イスラム革命以前に行われていた人口抑制政策が革命によってストップしたこと。さらには1980年に勃発したイラン・イラク戦争によって『産めよ、増やせよ』ということが奨励されたことに起因している。その結果、1990年代以降のイランでは、学校が足りない、大学が足りない、若者の就職先が無い、という問題が起り、急激な人口抑制政策に転じたイラン政府は『子どもは少なければ少ないほど良い』『子どもは二人までは良いが、一人ならもっと良い』といったキャンペーンを展開している。

#### 《多民族国家イラン》

イランは多民族国家である。主な民族はペルシャ人であり、通常我々がイラン人と呼ぶペルシャ人以外にも、トルコ人、クルド人、アラブ人などが住んでいる。また、国全体に住んでいるペルシャ人の他に、トルコ人やクルド人、アラブ人、そして多くの少数民族が存在している。また、言語について言えば、ペルシャ人はペルシャ語を、トルコ人はアーザリー語といわれるトルコ語の一種を、クルド人はクルド語を、アラブ人はアラビア語を話すという多様性を持っている。つまり、多様な民族の人がいてそれぞれが共存しあって生きている国だと言える。

次に宗教について説明すると、イスラム教徒がほとんどで、国民の98%はイスラム教徒である。イランが他のアラブの国々と大きく違っている点として、イスラム教の中でもシーア派を信仰する人々が大多数であるということが挙げられる。スンニー派を信仰しているのは、クルド人やアラブ人といったイラン国内で

は少数派の人々であり、ペルシャ人の殆どはシーア派である。一般に全世界のイスラム教徒の中でシーア派の人々は1割くらいしかいないと言われている。ちなみに、全世界のイスラム教徒人口は約13億人と言われている。イスラム教徒はどちらかという子どもが多い家庭が多かったり、家族を大事にする意識が強いいため、必然的にイスラム教徒の人口は増加を続けており、近い将来には、世界人口の1/4はイスラム教徒という日が訪れるのではないかとされている。シーア派とスンニー派の教義はほぼ変わらず、どちらもコーランに基づいた生活を基本としている。両者の違いの主な点は、イスラム教徒を開祖したムハンマドの後継者が誰かと言うことである。

- スンニー派**●自分たちを正統派と位置づける人々。
- シーア派**●スンニー派とは違い、第4代カリフのアリー及びアリーの子孫をムハンマドの後継者と考える人々。

スンニー派とシーア派との間に時々争いが起こることがあるが、それは直接教義の違いなどに起因するようなものではなく、社会経済的な理由によるものである。イラン人やペルシャ人は『我々はアーリア人である』という意識を持っている。中東にはアラブ人・イラン人・トルコ人などの民族が住んでいるが、イラン人は自分たちはアラブ人やトルコ人とは違うという意識の強い人々である。つまり、歴史的に見てイランという国の人々は、主流派のアラブの人たちのイスラム教スンニー派ではなく、アーリア人であるイラン人としてイスラム教シーア派を選択的に選んだと言うこともできる。

この他、イランにはキリスト教徒（アルメニア教徒）・ゾロアスター教徒・ユダヤ教徒なども居住している。ちなみにゾロアスター教は、火を神聖なものとして尊ぶ宗教で、土が遺体で穢れることをおそれて遺体を土中に埋葬することは不可とされてきた。その代わりに山の上に死体を置き、鳥に捧げる鳥葬という風習を持っていたが、現在では禁止されたため、遺体をコンクリート詰めにして土中に埋葬するという方法を取っている。

また、シーア派の国イランならではの宗教行事として、アーシュラーがある。これは、敵に殺されたアリーの息子ホセインを追悼する行事であり、シーア派独自の宗教行事である。この行事が行われる日は、みな喪に服す意味から黒い服をまとい、男性たちはアリーの痛みを自分の痛みとするため、鎖で自分の身体を打ちながら、街の中を練り歩く。アーシュラーは、世界中のシーア派の人々によってそれぞれ独自のやり方で執り行われる。イランでは各国のアーシュラーの儀礼をテレビで放映しているのが見られたりする。

通常イスラムのモスクでは現世利益を神にお願いしてはいけない。そのため、日本の神社で行うような、病気が治りますように、子どもが産まれますように、

試験に合格しますように、といった願掛けをするときには、イスラム教徒は聖者廟へお参りするという習慣がイスラム世界全体で見られる。イランではこのような聖者廟のことをイマームザーデと呼んでいる。願を掛けるに当たっては、事前に、晴れて願いが叶ったら10人の貧者に食べ物を配りますとか、お金を渡しますといった約束事しておくので、願いが叶った暁にはパーティーなども催される。

イランの新年は3月の春分の日である。中東諸国でこの時期にお正月を祝うのはイランのみであり、これはゾロアスター教の影響があるのではないかと推察されている。イランは農業国であることからしても、太陽暦に基づき春分の日をお正月とすることは、理にかなっていると言える。お正月には正月用の飾りをするが、通常『7つのS』と言われるもの（sir=にんにく・sib=りんご・serke=酢・seleh=コイン・sabzer=草・sonbol=ヒヤシンスなど）を飾ると幸せがくるとされている。その他飾りとして欠かせないものに、コーランや色つきの卵、蠟燭や鏡がある。コーランや鏡は、結婚式などのおめでたい場でも飾られることがある。お正月のお祝いもイラン独自のものであり、他のイスラム諸国には見られない。

### 《イラン現代史》

現在のイランについてマスコミを一番賑わせているのは核の問題と言えるだろう。イランの核が危険視されている理由は、何よりイランがアメリカと対立している国だからである。このアメリカとの対立の発端となったのが、1979年に起こったイラン・イスラム革命である。この革命によりパフラヴィー国王が追放され、その代わりにホメイニ師が指導者となった。そもそもイランという国は、イギリスの植民地であったインド（現在パキスタンとして独立した部分）に隣接し、北側ではロシアとも近接している。そのため、中東の緩衝国と位置づけられ、近代史上絶えずイギリスとロシアからの干渉を受けていた。1907年には、英露協商という取り決めがなされ、その内容は事実上イランをイギリスとロシアで二分するものであった。このように英露両国の影響力が強い中で、イランの人たちが、それらの勢力を追い出し、また国王による専制に抗議するべく立ち上がるには、その当時の一番のインテリであるイスラム教を学んだ聖職者たちが必要とされた。つまり、政治的な抵抗運動の思想的なバックグラウンドを与えるために、エリートとしての聖職者が存在したのである。このようなパターンは1979年のイラン・イスラム革命以前からみられた現象である。

パフラヴィー朝の初代国王レザー・シャーはトルコのケマル・パシャを尊敬し、トルコのとった近代化政策に憧れた。1921年に成立したパフラヴィー朝は欧米的な近代国家を築くことを目指し、近代化政策を推進した。そのような政策の一つに1936年に出された『女性のヘジャーブ禁止』がある。近代化政策を急

ぐ余り、全ての女性にイスラムのヘジャーブを取れというのは非常に極端な政策であり、女性がヘジャーブなしで街を歩くなどということが一般的ではなかった当時では大きな抵抗が起こり、1941年には廃止された。こういった事例からも分かるように、国王は無理に近代化政策を進めるところがあった。このような急速な近代化によって、恩恵を被った女性がいなかったわけではない。「ヘジャーブを取って良い」と言われて喜んだ女性が多くいたことも事実であり、またこの頃、女子学校が続々とできたということも事実である。教育を受けた女性の社会進出が進み、女性の中には「国王の時代が良かった」と言って当時を懐かしむ人が少なからずいることも事実である。他方で、イスラム教の熱心な信者、エリートであるイスラムの学者にとって、イスラムに対して非常に厳しい政策をとった国王は許せない存在であった。イスラムについて語るときに一番複雑なのは『どういう形で発展していくことが一番自分たちにとって望ましいのか?』という合意が無いままに国王に一方的に進むべき方向を示されても、ついていけない人といけない人がいるということである。パフラヴィー朝がやろうとしていたことの中には良いことも沢山あった。それにも関わらずその王朝に対して民衆がNOを突きつけ、革命に走ったということの背景には、多様な価値観を認めないまま、一方だけ、一方向だけに進んでいった王朝の悲劇があるのではないかと思われる。

イラン・イスラム革命で指導的役割を果たしたと言われているのがホメイニ師である。ホメイニ師はイランが近代化政策を推し進めていた時期に、抗議活動を行ったとして国外追放され、長きに渡って亡命生活を送っていた人物である。当初はイラクに滞在していたが、その後パリに移り、パリではイランの反体制運動を行う人々や学生運動を行っている学生等と親交を深め、イランを変革するための指導者になった。国王は近代化政策を押し付けているが、国王の言っている近代化はアメリカ化でしかない、アメリカからは色々な文化が入ってくるが、その影響をうけた若い女性がミニスカートををはいて街を闊歩する様子を見ていると、道徳までもが壊れていく気がする、ただただアメリカ文化を猿真似するだけでは、なんだか上手くいかない、農村で食べていくことができなくなった人が都市に流入し、スラムができる、こういった状況を目の当たりにした人々は、このままで果たして自分たちが幸せになれるのかということに疑問を抱いていた。また国王は、石油によって得た富を民衆に分配することはしなかったため、貧富の差が拡大し、なおかつ『近代化はするが民主化はしない』という姿勢で反対派の政治活動を弾圧したため、『国王がイメージするイランの近代化＝国王独りがひっぱっていくアメリカ化』というような様相を呈することとなってしまった。その結果、革命の初期の段階では『国王を追い出しさえすれば幸せになれる』という意識が民衆の中に共通していたことは、重要なポイントであると言える。国王が余りにもイスラムを軽視していると感じるイスラム教の信者、近代化は何の利益ももた

らさないと考えるバザールの商人、労働運動を禁止された一般の労働者、もっとイスラムの教えに則した生活を送りたい女性、民主的な政治の中でもっとも自分が発言する場が欲しい女性。色々な立場の人が、募る国王への不満から『とにかく国王さえいなくなれば、皆が幸せになれる。自分の理想とする世界を実現できる』との思いを抱いたのがイラン・イスラム革命だったわけである。その結果、一方ではベールをかぶらないキャリアウーマンたちが自分の発言力を増すために、また他方ではチャドルを頭からすっぽり被ったような女性が「今の様な社会ではいけない」と言いながら、多様な階層の人たち、多様な思想を持った人たちがただ一点『国王を倒す』ということだけでつながり、デモやストを行った結果、イラン・イスラム革命が成就したわけである。

さて、イラン・イスラム革命の後大きな問題となったのは『国王がいなくなったあとで、どういう世界をつくるのか』と言うことであった。このことを巡っては、熾烈な権力闘争が展開された。ホメイニ師はこの革命のシンボリック的存在であり、私利私欲を考えず、周りの人のために革命を先導してきた人物であると言われている。そのため、今でもホメイニ師自身に対する評価はそれほど低くない。イラン・イスラム革命に際し、ホメイニ師を担いだ人たちの中には、厳格なイスラム教徒が多かった。革命後、混乱するイランの状況を最終的に救ったのは、サダム・フセインであった。1980年にイラクのサダム・フセインが国境を越えてイランに侵攻したことをきっかけに、イラン・イラク戦争が勃発した。これを機に革命後に混乱していたイランの人々が一致団結することとなった。もともと『我々はアラブ人ではない。イラン人なのだ』という意識が強い人たちである。おそらく戦争が無ければ、ばらばらになっていたかもしれない、余りにもそれぞれの価値観や、思い描く将来に向けたシナリオが違う革命勢力に、一致団結しなければならぬ状況を作り出し、民衆の団結を促したのがこの戦争だった。この緊急事態に、最終的に最も高い権力の座についたのがホメイニ師の率いる宗教勢力だったわけである。つまり、現在のイランが宗教国家になったのは、戦争をきっかけに、国を一つにしなければならぬという状況の中で、国民の結束の拠り所を宗教勢力に求めた結果である。

さて先ほど、イランはロシアとイギリスに挟まれ、影響を受け続けてきたということをお話した。ところが、第二次世界大戦終了後、ロシアはソ連へと変わって中東への影響を保持したが、イギリスやフランスは植民地を失ったことで影響力が低下した。新たに中東への影響力を持ち始めたのがアメリカである。アメリカとソ連による東西冷戦の狭間で、イランはアメリカ側に付くこととなる。そもそも国王自身、アメリカ的なもの、アメリカのような発展のあり方に非常に魅力を感じており、一方アメリカも中東を押さえるために絶対必要な国がイランであると考えていたため、両者の利害は一致し、アメリカと王家は強いつながりを持

つこととなった。国王はイラン・イスラム革命で失脚した後、最終的には病気の治療を目的にアメリカに渡った。この顛末を見て、イランの革命勢力の間には一つの記憶が甦る。その記憶とは1951年に起こった石油国有化運動である。このときアメリカは、密かにその力を行使し（具体的には、CIAが関与し、イランの人々にお金を渡すことで、石油国有化法案反対のデモを扇動した）石油国有化法案をなし崩しにした。イランの石油国有化運動というのは、ナショナリズムの台頭により、1951年共産主義勢力が、「なぜ、イランの石油からあがる利益をイギリスが持っていかなければならないのか」と主張したことに起因している。エジプトでもスエズ運河の国有化が第二次中東戦争の引き金となったように、資源の取り扱いというのは常に大きな問題である。1951年に起こった石油国有化運動は、結局当時の首相が失脚したことで頓挫してしまった。

このようにイランの政治に対してアメリカは幾度となく影響力を行使してきた。このような状況の下、イランの若者たちがアメリカ大使館になだれ込み、30数名の大使館職員を人質にたてこもるといった事件が起きた。この人質事件は実に444日にも及ぶものとなった。これによってアメリカとイランの関係は完全に崩壊し、アメリカは未だにイランに大使館を持つことができない状況にある。この事件の背景には『折角国王を追放することができたのに、ここでアメリカの介入を許したら革命が失敗に終わってしまう』という危機感が人々の間に広がったことがあると思われる。革命後のイランでは、戦争による危機感で一致団結するだけでなく、アメリカの介入を許さないという気持ちでも一致団結した。

今日のイランでも個人的にはアメリカが好き、アメリカの文化が好きという人は沢山いる。しかしその一方で、アメリカがイランに対して行う様々な介入は決して許せないという人も多い。今でもアメリカとイランの関係はこのときのことを引きずっていると言えるだろう。また、アメリカでも毎日のように前述のイランでの出来事が「イランにはこういう怖い人たちがいる」というトーンで報道されたことから、アメリカの人たちのイランの人たちに対する嫌悪、特にシーア派の人たちに対する嫌悪感は大きい。

## 《イランの現状》

イランの社会はいろいろな意味で二重構造であると言える。その一つにイラン政府に最高指導者と大統領の両方が存在することが挙げられる。イランは、革命後国民投票で自らの国をイスラム共和国とすることを選択した。イスラム共和国とは何かと言うと、イスラムを中心とした国づくりを行うということであり、その一つの表れが大統領とは別に、イスラムの最高指導者を置くことである。初代の最高指導者には革命の指導者であったホメイニ師が就き、ホメイニ師が没した1989年以降は、ホメイニ師没時の大統領であったハメネイが最高指導者の職

に就いた。最高指導者は選挙で選ばれた大統領と、時には同等の政治的権力を持つ。

1997年にハタミが大統領に就任したとき「イランは変わるかもしれない」と言われた。このときハタミは「恐らく大統領にはなれないだろう」と言われていたにもかかわらず、地滑りのように勝利を収め、大統領に就任したのである。これは、ハタミ大統領がスローガンとして掲げた『自由』が、特にイスラム共和国となって以降ヘジャーズ着用義務化や、宗教的な生活に息苦しさを感じていた女性や若者には、とても魅力的なものに思えたからであろう。しかし、結果的には二重構造のおかげで、ハタミ大統領は大きな成果をあげることができないまま任期を終えた。誰もがイランはこのまま変わるだろうと思っていたにもかかわらず、大統領以外に最高指導者が君臨し、司法関係者や軍関係者に極めて保守的なイスラム教信者が多い状況下では、ハタミ大統領が新しいことを行おうとしても容易に行える状況ではなかった。イランの大統領は、アメリカと同様4年任期で1回だけ再選が認められている。現在ハタミは8年の任期を終え、2005年からはアフマディネジャードが大統領に就任した。先ほどハタミ大統領は、目立った成果をあげることができないまま、任期を終えたと述べた。目立った成果をあげられなかった理由の一つに国内の抵抗勢力の存在がある。抵抗勢力となっている人たちは、何れもイスラム共和国になってから、既得権益を得た人ばかりである。現在のイランには、革命後に新たに権益を持った人が多く存在する。そういう人たちは、イランという国が変わることを良しとしない。今年の選挙で選出された強硬派と言われるアフマディネジャード氏の支援者の多くがこれらの人々であった。ハタミは聖職者であったが、アフマディネジャードは聖職者ではない。革命の後力をつけた、聖職者ではないがイスラミ的な保守的な考え方を持った政治家である。今のイランではこういう人が大統領になるまでに育ってきた。革命が終わって既得権益を得た人々の中からは、大統領のみならず多くの国会議員も輩出されている。現在のアフマディネジャード大統領は、伝統的なイスラムではなく、革命後新しくイランで育った独自のイスラムの原理を前面に押し出しているところがある。前大統領であるハタミはその在任中「異なる文明間は、今は対立すべき時ではない。今は対話をすべき時だ」「アメリカもキリスト教徒もイスラム教徒も皆、対話をしていこう！」と文明間の対話を主張した。にもかかわらず、同時多発テロ事件が起き、イラク戦争が起こった。そして一番悪いタイミングで、イラン国内に強硬派と言われるアフマディネジャード大統領が誕生したのである。アフマディネジャード大統領は「アウシュビッツは無かった」というような発言を行う人物である。こういった発言は、欧米諸国の人にとってはたいへんな問題発言だ。アフマディネジャード大統領がこういった発言をするのには、イラン国内にいる強硬派、保守派と呼ばれる人々をまとめ国をまとめていくためには、国

外、とりわけアメリカ・イスラエルに強い態度で臨まなければ国内にしめしがつかないという事情があるからである。アフマディネジャード自身、自分にさほど人気が無いことは知っている。事実選挙のときも、それほど名の通った人ではなかった。今回の選挙には、ハタミの前に大統領を務めていたラフサンジャニも出馬した。ラフサンジャニは大統領在任中に、私財を肥やしたという悪評があり、今回の選挙においても選挙運動の中で、若者の関心を買うべく、インターネットができるカードをばらまいたりするなどした。こういったラフサンジャニの選挙運動のやり方はイランの人々の間に「一体選挙にいくらのお金を使っているのか！」という反発を招くこととなった。一方、ハタミの後継もなかなか適切な人がおらず、いるのはエリート然とした庶民が近寄り難いような人であった。そのような中、アフマディネジャードは、選挙活動もいたって地味で、テレビで紹介される家や暮らしも非常に質素であることから「ラフサンジャニよりアフマディネジャードの方がいいか」ということで選ばれた人であり、国民の積極的な支持を得て選ばれた人ではない。そのため、外に対して強硬な意見を主張することで、イラン国内で英雄になる、国内の保守派の人たちを納得させるしか道が無い人である。したがって、これは推測でしかないが、現在取りざたされている核疑惑についても、ぎりぎりのところまで頑張るであろう。恐らくアフマディネジャード大統領自身、交渉のテーブルにつきたいと思っているであろうし、多くのイラン人は「大統領はもっと柔軟に交渉すれば良いのに」と思っているであろう。しかしアフマディネジャード大統領は国内基盤が脆弱であるため、対外的に弱く出してしまうと、自分の基盤が揺らぐことになってしまう。したがって日本で報道を見ていると「イランの人たちはこんなに頭が固いの？こんなに石頭ばかりなの？」と思うような態度をとっているかもしれないが、それはぎりぎりのところまで頑張っているだけだと思う。そこまで頑張らないと国内の保守派が納得しない、自分の支持基盤が確立しないという事情があるだけである。タイミング的には最悪の時に出てきたこの核疑惑である。アフマディネジャード大統領は最後の最後まで強硬な姿勢を貫くであろうし、その一方でロシア、中国、ヨーロッパに対してはアメリカとは違う態度で接するであろう。アフマディネジャードは決して、宗教的に狂信的に突っ走っているわけではなく、二重構造であるが故のそれなりに計算された対外政策をとっているだけなのであるが、日本の報道ではなかなかそこまでは伝わってこない。

以前のハタミ政権下では、アメリカとの関係も幾分改善され、禁輸政策も一部緩和されようとしていた。このまま関係改善が進むかと思われたが、その期待を打ち壊したのが9・11であった。9・11事件の後、イランとイラクと北朝鮮は同一視されてしまった。このことはイランの人々にとって非常にショックなことであった。1997年にハタミが大統領となってから後、イランはアメリカに



対してもものすごい柔軟さを発揮した。プライドが高く、普段はなかなか自分の方から外への働きかけなどしないイランの人々が初めて『文明の対話』というキャッチフレーズのもと、アメリカに働きかけたのである。その結果、アメリカとの関係が雪解けになるかと思っていた矢先、9・11の事件が起こった。このときイランの人々は「自分たちはイラクとは違う。アフガニスタンとは違う」という思いが強く、まさかイラクと同一視されるなどとは思っていなかった。しかし結果的にはアメリカはあくまでもイランをテロリスト国家と位置づけ、イラクや北朝鮮と共に『悪の枢軸』と呼んだ。その結果、対外的にも国内に対しても人気のあったハタミ大統領の基盤は全部崩れたわけである。今後、イランとアメリカの関係が改善するチャンスもあるかもしれない。ただ、今は待つ時だろうと感じる。

## 【イランの社会と女性について】

### 《イスラム革命が女性にもたらしたもの》

イスラム革命の結果、女性が身につけるようになったものにヘジャーブ（＝ムスリム女性が外出する際に頭部を覆い隠す服装のこと）がある。ヘジャーブの着用は、革命後直ちに法律で厳しく義務付けられたわけではなかったが、革命の途中から徐々に周りの目が厳しくなっていく中で、皆が着用するようになり、革命後になって最終的に法制化された。現在は例え外国人であってもイランに入ったらヘジャーブを身につけることが義務付けられている。そもそもヘジャーブを身につけることの持つ意味は『美しいものは自分の家族以外の人には見せない』ということである。この考え方のベースには人間性弱説があって、もともと弱い人間を誘惑すれば誘惑されるのが当たり前のだから、それは誘惑する方が悪い。美しい髪や身体の線等をむやみに見せるようなことはすべきでないということである。女性が隠すのは髪と体の線とされているが、イスラム教の国々では例え男性であっても身体の線を露にすることは好まれないので、半袖や短パン姿の人はほとんどおらず、シャツをズボンの上から出してお尻の線を隠すことが多いようだ。女性のヘジャーブにも国によって地域によってさまざまなものがある。現在のイランでは、チャドルとよばれる頭から被る一枚布や「マントー」と呼ばれる体の線を隠すためのコートと頭に被るスカーフなどが着用されているのが一般的である。コートの長さや頭に被るスカーフの形は時代によって様々に変化している。

この他にもイスラム革命がもたらしたものは複数ある。イランでは1979年に家族保護法が停止された。家族保護法とは何かと言うと、イスラム諸国ではいくつかの国において制定されている法律であり、イスラム法をそのまま適用すると女性に不利になるような場合に、それを救済する意味から制定される法律である。例えばエジプトやチュニジアに今も有り、国王の時代にはイランも持ってい

た。イスラム法で問題となるのは『妻を4人まで持つことができる』ということである。家族保護法の中には、コーランに『すべての妻を公平に扱うなら4人まで妻を持ってよい』と書かれていることから、複数の妻を公平に扱うための条件を記載してみたり、もし2番目の妻をもらう場合は1番目の妻の了解を得なければならないということを定めたりしているものもある。

もう一つイスラム法上問題とされるのが、タラーク（＝離婚）である。コーランには夫が「タラーク」と3回言えば無条件で離婚が成立すると書かれている。家族保護法の中には、タラーク婚の場合も色々と条件が必要であり「タラーク」と言っただけでは離婚は成立しないというようなことが定められているものもある。イランでも同様に家族保護法による取り決めがあったのだが、1979年にこの法律が停止したことで、以前のイスラム法に戻ってしまった。これは親権についても同様で、イスラム法では『子どもは父親のもの』とされており、男の子なら2歳まで、女の子なら7歳までは母親の下で育てても良いが、その後の親権等子どもに関する全ての権利は父親のものとする。イランでも家族保護法が機能していた当時は『特別な条件があれば母親に親権を与えても良い』とするなど要件が緩和されていたが、家族保護法の停止に伴いそれも反故にされた。家族保護法では、結婚の最低年齢も女性18歳男性20歳と定められていたが、その家族保護法が停止したことでイスラム法上女性は9歳から結婚できることになってしまった。勿論これは、法律上の最低年齢であり、現実には晩婚化が進んでいて、女性の結婚年齢は26歳とか27歳である。しかし、前述のようなことが法的にはまかり通ってしまうので、本来なら一刻も早く家族保護法を作らなければならない。しかし、家族保護法は即ち近代的、西洋的価値を持ち込むということになるので、政府の抵抗があるのが現実である。

このような状況に対しイランの女性は一つ一つ丁寧に闘っていく。親権についても現在では法律制度が変わり、女性でも親権が持てる場合も認められている。イスラム革命が起こってすぐ決まったことに『女性は裁判官になれない』ということがある。既にいた女性裁判官はその職を追われ、弁護士にならざるを得なかった。これはコーランに『女性は感情的になり易い動物である』という記述があることが原因で、そのような女性に冷静な判断はできないとされたわけである。しかしその後地道な抵抗運動を続け、現在では、限定的ではあるが女性の判事も生まれている。他方、女性議員にはそれほど抵抗は無く、有力政治家の未亡人や娘が跡を継ぐというような話は、革命後良く見られることである。むしろ女性議員の率などは、日本よりも高いし、ハタミ大統領の時には、女性が副大統領のポストを務めるまでになっている。

もう一つ特筆すべきことに女子教育がある。革命後男女隔離が進み、幼稚園と大学は男女共学であるが、小学校から高校までは男女別学となった。女子は小学

校の1年生からヘジャーブをかぶることを求められる。イランの民法では、大人とされヘジャーブをかぶらなければならないとされるのは8歳～9歳である。女子は8歳の時に『これからイスラミ的な義務が生じますよ』というお祝いの日を迎え、男子は15歳の時に同様の祝いの日を迎える。教育の分野などで最近「パラドックス」と言われているが、男女隔離が進むことによって女性の社会的進出や就学率が上がるという現象が起きている。一つはあらゆるところで男女隔離が進むことによって生じる女性の就業機会の拡大である。学校が男子学校女子学校に分かれると、男性の先生、女性の先生がそれぞれ必要となる。また、緊急時は認められているとは言え、女性は男性医師の診察を受けることに抵抗が有ることから、女性の医者数が急増する。実際1976年と1996年のデータを比較してみると、女性の専門職の就業機会が増加していることが良く分かる。また、女性の就業機会が増加したことの原因の一つには戦争もある。男性が兵士として戦場に赴く状況下では、当然女性も働く必要が出てきた。実際、今の30代後半から40代位の世代には未婚者や未亡人も多く、この世代では男女の比率がバランスを欠いている。他方、女子の就学率もアップし、現在各教育段階における女子の比率はほぼ半分となっている。去年などは、大学合格者数の半数以上を女性が占めることとなった。これは、イスラム革命によって、学校がイスラミ的になったことで、親たちが安心して自分の娘を学校に通わせるようになったことの結果である。以前のような近代化政策下の学校では、こんな学校に通わせたら、近代的な感覚を身につけた子どもになってしまうのではないかと、親に反抗するようになるのではないかと、反イスラミ的で反道徳的な子どもになってしまうのではないかとといった心配をしていたのが、学校が完全にイスラム化したことで、安心して通わせることができるようになったわけである。おかげで現在では女子の就学率もほぼ100%となり、イランでは女性を家に閉じ込めるような空気は感じられない。様々な議論は有るが、国がイスラム化したことで、チャドルさえ身につければ、女性がどのような公共の領域にでも入っていくことができるようになったとして、肯定する見方があることも事実である。

### 《イラン女性の闘い》

シーリーン・エバーディー：2003年ノーベル平和賞受賞者。もともとは裁判官であったが、革命の結果弁護士に転身。イラン国内で、親権が取れない女性や、離婚ができない女性の支援など女性の権利を守るための地道な活動を続けている。

映画「離婚」イギリス在住のジバ・ミル＝ホセイニが監督。イラン国内における離婚をめぐる出来事をドキュメンタリー映画にまとめたもの。イランではイスラム革命後女性の側からの離婚の申し出が一切できない状況にあったが、地道な

活動の結果、結婚の時にどういう場合に離婚するかを予め定めておけば、それに基づいた離婚申し立てを女性の側から行うことができるというように変わってきている。

### 《イスラムと家族》

イランでは働く女性が増えたが、条件的には厳しい。その原因は、手間や時間のかかる料理が多いため家事労働が大変であることや、子どもを公的に預けるところの絶対数が少ないことにある。ただイランの子どもは家庭内で自分の役割をしっかりと担っており、自分の与えられた役回りをきちんとなしていることも事実である。家族の絆が強いイランでは、子どもを育てるにあたっては子どもの祖父母や自分の兄弟などに手助けを頼み、子どもも頻繁に行き来のある親族関係の中で人とのつきあい方などを身につけていくことが一般的である。

そんなイランでも現在では大都市などでの核家族化が進み、そういった手助けを頼むことも困難な状況になりつつある。幸いイランの職場はフレキシブルで、子どものいる人の短時間労働や夏休み中や放課後に子どもが親の職場に来ることを容認する空気があるため、何とかしのげているような所もある。経済優先の日本社会とは違い、「子どもは宝」という感覚が強く残っている社会である。